

日本語教育用 AV リソース公開サイト「mic-J」¹ : 2014 年の状況

<http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/mic-j/>²

西郡仁朗

1. 「mic-J」サイト構築の経緯と本稿の目的

本サイトは、2001年に試験公開が始まったが、当初の目的は、「東京都立大学」に学ぶ留学生が、日本語の自学自習を行えるよう支援するためのものであった（参照：西郡, 2002; 西郡, 2004）。当時の東京都立大学には200名を大きく上回る留学生が在籍していたが、同等の留学生数を受け入れている国立大学で次々と設立されていた留学生センター³や国際センターもなく、留学生教育担当の日本語および専門科目の専任教員もいない状況であった。筆者は、人文学部国文学専攻に所属し、専門科目と留学生向けの日本語・日本事情科目を担当していたが、留学生への日本語教育は他大学に比べ不十分と言わざるを得ない状況にあった。学部に入學した私費外国人留学生・中国帰国者向けには、正規外国語科目として、日本語Ⅰ、日本語Ⅱ、日本事情が開講されていたが、私費外国人留学生・中国帰国者は、すでに上級以上の日本語能力を有しており⁴、これらの授業は、大学でのアカデミックな専門内容に対応すべく、レポートの作成やセミナーでの口頭発表能力の養成を主目的としたものである。日本語能力の面から見れば、初級・中級段階にある交換留学生や大学院生、研究生への支援の方が必要だったのであるが、上記の科目以外の開設はなかなか進展せず、留学生側、特に数の多い大学院生、研究生からの支援を求める声が非常に強かった。「日本語講習会」という者金講師⁵による週一回の非公式な夜間教室や、近隣住民のボランティアによる日本語会話練習の支援もあったが、十分というには程遠いものであった。こうした

¹ “mic-J”は multimedia-supported, interactive, communicative な特徴を有する J（日本語）学習サイトの意味で名づけられた。

² URL は 2004 年当初は <http://japanese.human.metro-u.ac.jp/> であったが、大学の改革・統合により、2011 年 9 月よりドメイン名は hum.tmu.ac.jp に変更・統一された。

³ 1990 年以降、文部科学省（当時、文部省）では、留学生が多数在籍する国立大学に省令による留学生センターの設置を促進していた。

⁴ 学部の入学試験では旧『日本語能力試験』1 級合格が前提条件とされていた。

⁵ 当時の学生課留学生担当の配慮による。

厳しい環境の中、留学生の日本学習を支援する一つの方法として、電子メディアを用いた自学自習システムを構築してきた(西郡,1999 参照)。初めは教材をインストールしたパーソナルコンピュータを用意し(所謂, スタンド・アローン型), 利用者が特定の場所(一時期は本部棟2階, その後, 国際交流会館の「留学生交流室」)へ, 開室時間中(平日午後1時から5時)に赴いて利用する方法をとっていた⁶。学内のICT環境や機器の整備が進み, 徐々にネットワークでの教材配信に切り替えて行った。

2004年当時のmic-Jサイトの内容については, 西郡(2004)を参照されたい。

その後, 本学は2005年に「首都大学東京」に改組・統合され, 国際化の進展, 留学生の受け入れ拡大, 留学生教育の充実が大学全体の重点項目の一つとなっており, これらの分野は目覚ましい展開を見せている。特に, 2006年度に人文科学研究科に「日本語教育学教室」が開設されて日本語教育関係の教員が増員・組織化されたこと, また, 2009年度に国際センターが創立され, 交換留学生在が急増しているとともに, 日本語の科目が「国際交流科目」群の「基礎日本語」として多数開設されたことにより, 交換留学生・大学院生・研究生への日本語教育態勢は急速に充実してきている。さらに, 同2009年度からは, 東京都施策として『アジア人材育成基金』が始まって, 本学諸分野の博士後期課程にアジア各国の留学生を受け入れられるようになり, 彼らに対する日本語教育も課題となった⁷。

このような背景のもとで, 本サイトも, さまざまな留学生に対応すべく目的や内容(コンテンツ)が多様化している。基礎的な日本語教育教材整備を基本にはしてきている⁸が, 新しい日本文化論や, 実際の日本語談話のデータなども含めたコンテンツに広がっている。また, 必ずしも在籍留学生の自学自習を主目的とするものではなく, 対面型授業での予習復習や遠隔教育での利用など, 使用目的も多様になってきている。特に, 上記アジア人材育成基金では, アジア各国の大学との連携を充実すべく『遠隔教育』が推進され, テレビ会議システムを通じ

⁶ 主にApple社のHyperCardを用いて作成していた。

⁷ 詳細については下記のサイト参照されたい(2014年8月21日アクセス)。

<http://www.asianhumannet.org/student/index.html>

⁸ 2012年度から国際センターでの日本語教育開発も始まっており, その成果が本サイトでも一部公開されている。

た海外の大学との授業や共同セミナー、SNS による海外の学生との交流が拡大しており、これに対応したコンテンツ開発も必要になってきている。

WEB サイトにおける開発の趣旨と利用許諾の範囲は次のように記されている。

「このサイトは首都大学東京／東京都立大学の留学生が日本語を自習するためのものです。しかし、教育目的であればどなたでもご自由にお使いいただきかまいません。ただし、どこで使用しているか、どんな目的で使用しているか、素材の問題点などを管理人にお伝えいただければ幸いです。商用目的の使用はご遠慮ください。」

現在、遠隔教育などで教育交流のある国内外7大学で組織的利用があり、また、数多くの学習者が個人的に利用している⁹。

本稿では、サイト内容の紹介を主な目的とするが、遠隔教育の開始の経緯については Nishigori (2008)、西郡ら(2009)を参照されたい。また、『アジア人材育成基金』による遠隔教育の詳細については別項に譲る。

2. コンテンツの柔構造性と開発の柔軟性

本サイトのコンテンツは、特定のコースだけに対応したものにはなっていない。一つ一つに一応の完結性はあるが、全体として剛構造とはなっていない。

西郡(1999)でも指摘したようにマルチメディア素材の教育利用では、実際の教育現場に合わせたコース・ウェアの編集可能性 (customizability) が重要であり、本サイトは、個々のコンテンツ全体としても部分としてもカスタマイズして利用できるような柔構造となっている。

また、現代の学習者は、インターネット上での素材の検索や利用に幼い頃から親しんでおり、管理された剛構造での教育ではなく、学習者自らが、個人またはグループで「主体」となって、ネット上での学習を自律的に進めて行く傾向がある¹⁰。本サイト内容の利用についても、インターネット上の様々な資料やツ

⁹ 個人による使用は自由であり、詳細な追跡調査は難しいため、本稿では行っていない。

¹⁰ この傾向は Karrer, T (2007)などが、所謂“WEB 2.0”ツールによる“eLearning 2.0”として予見している。本稿終章参照。

ルを併せて利用することも含め、対面授業、遠隔教育、ブレンディド・ラーニング、ピア学習、自習などいろいろな形態で使用されることに配慮している。

どのようなコンテンツを制作するかに関しては、原則として、年度毎に人文科学研究科日本語教育学教室の著者のゼミにおいて留学生を含む院生との議論を経て決定してきた（他の教員やそのゼミとの共同のものも含まれる）。長期計画を明確にしているわけではなく、全体としての統一性から見ると不明瞭な点もあるが、制作に関して柔軟性をとることができたことは、本サイトの長期間の継続性に動機の面につながったと思われる。年度毎のプロジェクトワークとして完結している点や、遠隔教育および対面型教育での実際の利用を背景としていること、また、教員や留学生を含む院生が、その時に求められていると感じるコンテンツを自らが開発する点は、毎年一部ずつ交代して行くスタッフのまとめりや動機向上につながったと実感する。

3. 「mic-J」の現状：2014年10月

以下に2014年10月時点で公開されているコンテンツの一覧と概要を記す。
また、図-1に日本語版のトップページを示す。

(1) 『東京の言語景観 Linguistic Landscapes of Tokyo』（2014年10月公開）

「言語景観」について概説するとともに、東京の2014年の言語景観の状況の一部を紹介している。2020年東京オリンピック・パラリンピックでの多言語対応についてのコメントは「東京都オリンピック・パラリンピック準備局」の協力を得た。記して感謝する。

これはトライアル版であり日本語版ビデオだけだが、今後、日本語教育学や社会言語学の教育・研究に資するため多言語の字幕付きのビデオや資料を制作公開して行く。詳細については別稿に譲る。

(2) 『きらきらオノマトペ』素材集（2014年8月公開）

外国人には習得が難しいとされるオノマトペのうち基本的なオノマトペ72語をとりあげ、大学生の生活の中で実際にどのように使われているかを

動画化した。オノマトペの選択の考え方に関しては、三上(2007)を基本的な資料としている。また、外国人学習者のオノマトペの理解や音象徴に関する基本的な調査(王・西郡・デディ, 2010; 王, 2011)を行った上で、スクリプトの制作と各オノマトペの意味論的分析を行っている。ビデオと多言語スクリプト・多言語解説(日本語, 英語, 中国語, 韓国語, インドネシア語からなっている。この教材の開発の詳細の関しては西郡・王(2015)を参照されたい。

The screenshot shows the homepage of the 'mic-J' website, which is a resource for Japanese language education. The header includes the title '首都大学東京 mic-J 日本語教育 AV リソース' and a navigation menu with links for ENGLISH, CHINESE, KOREAN, Traditional Chinese, and INDONESIAN. Below the header, there is a large 'mic-J' logo and the text 'TMU japanese-site' and 'ミラーサイト nihongo-site'. A paragraph of text explains the site's purpose for students and provides contact information for the administrator, Jiro NISHIGORI. A blue bar indicates the number of visitors (916994) and the date (1999年4月12日以降). The main content area is a grid of resource cards, each with a title, a thumbnail image, and a brief description. The cards include: 'とうきょうのげんごけいかん' (東京の言語景観), 'きらきらオノマトペ' (オノマトペ), 'しよきゆうにほんごN5' (Elementary Japanese にほんご N5), 'N2レベル ちょうかい' (N2 聴解), 'VoAsp - China New' (Vo Asp), 'そくおん KITEKITTE multilingual' (KITEKITTE), 'にほんごおんせいデータベースしよきゆうへん' (SOUND DB), 'とうきょうごのアクセント' (アクセント), 'にほんごじゆじゆひょうげんきそへん' (Juju), and 'mic-J corpus がいこくじんへのインタビュー' (corpus FI).

図-1 「mic-J」の現状(2014年10月)その1

mic-J corpus にほんじんへのインタビュー		「mic-J corpus 日本人へのインタビュー」日本人学生へのインタビュー。動画、BTSJによるデータつき。自然会話の研究と学習に利用可能。
ゆめをつむぐまちとうきょう2		「夢を紡ぐ町東京2」中級者向け。若い技術者とダンサーへのインタビューと大田区・多摩地域の紹介。QuickTime動画、スクリプト、タスクシートつき。
ハイパーけいごにゆうもん		「ハイパー敬語入門」敬語の使い方をマルチメディアを使って学べます。日本語・中国語・韓国語版。
いちようのしゃしんから		「一葉の写真から」写真による日本の社会や文化の紹介と、日本語上級者の読解練習のために制作されました。
ゆめをつむぐまちとうきょう		超上級者向け。若い文化人へのインタビューと彼らが活動する東京の地域の紹介。QuickTime動画、スクリプト、ヒントつき。
VoAsp - China		日本語の清音・濁音の聞き取り練習。中国語によるQuickTime動画・音声での説明と練習。
VoAsp - Korea		日本語の清音・濁音の聞き取り練習。韓国語によるQuickTime動画・音声での説明と練習。
VoAsp Traditional Chinese		日本語の清音・濁音の聞き取り練習。中国語によるQuickTime動画・音声での説明と練習。繁体字版。
ちょうかいレベル3		日本語能力試験3級レベルの聴解クイズ。音声はMP3ファイル。
ちょうかいレベル2		日本語能力試験2級レベルの聴解クイズ。音声はMP3ファイル。
ちょうかいレベル1		日本語能力試験1級レベルの聴解クイズ。音声はMP3ファイル。
けいご		相手・場面・話題の人物によって変わる敬語表現。QuickTime動画とスクリプト。
ぎたいご		擬態語についての説明と例文およびQuickTime動画・音声。英語・中国語・韓国語訳つき。

図-1 「mic-J」の現状（2014年10月）その2

(3) 『初級日本語 N5』β版（2014年8月公開）

初級日本語 N5 レベルの主教材として、国際センターにおいて開発されたものの電子メディア版である。音声付の会話、PDF のテキストと文法解説（英語版）がまとめられ26のユニットからなる。従来“mic-J Elementary”として公開されてきたもの（2009年～2012年）を大幅に改訂した。ビデオクイズなども付随・公開されているが、これは“mic-J Elementary”の際に制作されたものである。

(4) 『日本語能力試験 N2 レベル・聴解クイズ』（2014年7月公開）

このクイズは本学留学生のためのプレースメントテストとしての使用や、

本学の日本語教育プログラムの一環として国内外での聴解能力の測定と分析などに利用されてきたものである。開発時の考慮点や信頼性に関する分析は、神村・劉・柳ら(2010)を参照されたい。WEB 公開に際しては項目分析の結果、信頼性が高かったものが選択されている。

(5) 『VoAsp 改訂中国語版』 (2013年11月公開)

中国語(北京語)を母語とする学習者のための日本語の清音・濁音の聞き取りに関する説明と練習を行うもの。説明は動画により中国語で行われ、VOT(Voice Onset Time)をもとにした有声・無声子音/有気・無気の違いの解説により、両言語間の音韻の違いが意識化されるよう企図されている。下記(16)の内容とほぼ同じであるが、研究成果をもとに一部改編し、動画と音声の精度を高めている。練習問題には回答の正誤の自動チェック機能がついている。これまで、本教材(旧版)が、日本語の清音・濁音の聞き取り向上に効果的であることが示されてきている(西郡・小松ら, 2004; 宋・柳・西郡, 2005)。

(6) 『KITEKITTE マルチリンガル改訂版』

(2012年9月公開。旧版は2007年4月公開)

日本語促音の自習教材で日本語, 英語, 中国語, 韓国語, インドネシア語, ロシア語による解説とクイズからなっており練習問題には回答の正誤の自動チェック機能がついている。動画では日本語がモーラ(拍)と単位とする言語であり, 日本語母語話者の促音の知覚は無音閉鎖または摩擦性雑音の長さが基本であることが実例をもとに示されている。旧版作成の詳細は, 西郡ら(2007)を参照されたい。改訂版では英語版とロシア語版を加え, 動画・音声の精度を上げたこと, また, 中国南方方言での閉音節との関連の説明を強化するなどの修正を行っている。この教材を用いて発展させた研究として, 辛(2014)などがある。

(7) 『日本語音声データベース ～初級編～』 (2012年9月公開)

このデータベースは本研究室で音声教育や音韻論の研究で用いられてきたデータやリストが元になっている。これを整理し, また検索機能などを設

けることで、学内外の日本語教育者や学習者に広く利用されることを企図してデータベースとして公開することとした。初級の語彙、その語彙を用いた対話文、語彙と対話の音声、音声についての基本周波数曲線・音圧レベルの推移グラフからなっており、語彙や対話文の簡易検索と、文字情報と音声情報やグラフなどへのリンクが施されている¹¹。

制作に当たって考慮したことを以下に記す。

a. 初級語彙の選定に当たっては、以下の資料に一度でも登場していることを基本条件とした。

- ・国際交流基金・日本国際教育支援協会『日本語能力試験 出題基準<改訂版>』の3級4級語彙（2002年発行の旧試験の語彙表）
- ・华东理工大学出版社『日语能力考试3,4级文字词汇精解』
- ・上海外语教育出版社『新编日语』（1.2）

b. 対話文の作成に当たっては以下の基準に従った。

- ・一つの語彙について2つの文（各語彙を文頭を含む文，文中または文末に配置した文）をできる限り作成する（ただし，文作成上，この基準を満たさすことができない場合には，片方の文のみ，または語彙のみを提示する場合もある）。
- ・対話文は、『日本語能力試験 出題基準<改訂版>』の3級4級語彙の範囲内で作成すること。
- ・対話文は言語形成期を東京またはその近郊で過ごした東京語ネイティブスピーカー2名以上によって，自然なものであるという認定を受けたものであること。

c. 音声の録音に当たっては，ナレーション等を職業とする専門家が，東京語の韻律や発声に従った音声として発音し，音声学的に確認されたものであること（音声録音のディレクターと音声学の専門的知識を持つ者による確認）。

d. 各音声の画面においては，語彙と対話文のピッチの変動及び音圧の推

¹¹ 開発言語としてはJavaScriptを用いた。

移を表すグラフが示され、音声の再生と同期してグラフが示されること（グラフの作成に当たっては“PRAAT¹²”を利用した）。

(8)『東京語のアクセント』（2010年3月公開）

日本語（東京語）のアクセントについて説明し、練習を行うもので、主に二つの特徴がある。第一に、動画によって、音節とモーラの違い、及びモーラ間でピッチが変化するという高低アクセントの特徴が詳しく説明されていること、また、音声と同時にアクセントのピッチ曲線も提示し、ピッチの高低差を聴覚だけでなく視覚的にもイメージが浮かぶように配慮されている点である。第二に、同教材は日本語のほかに英語、中国語、韓国語による多言語版で、日本語学習の初期段階から学習者による自学自習が可能となっている。

この教材は、西郡・河合ら(1999)でのスタンド・アローン版をもとに、WEB版として再作成された。

(9)『日本語授受表現-基礎編』（2009年12月公開）

日本語のいろいろな授受動詞（物の受給に関する表現）についてマルチメディアを活用して学習できる内容となっている。

対象としている動詞は「あげる」「もらう」「くれる」「さしあげる」「いただく」「くださる」の7種で、外国人留学生の一年間の大学生活を題材にし、上記動詞がどのように使われているかを示すスキットを作成した。

スキットは8個の会話場面で構成されており、日本語の待遇表現の上下・親疎の関係を、久野(1978)の「カメラ・アングル」の概念を参照し、実際のカメラ・ワーク（ツーショットやローアングル・ハイアングルの表現の原理¹³）で表現することを試みている。

(10)『mic-J corpus 外国人へのインタビュー』（2009年12月公開）

¹² インターネット上でオランダ・アムステルダム大学の Paul Boersma と David Weenink らが中心に開発し公開されている音声分析用フリーソフト・ウェア。
(<http://www.fon.hum.uva.nl/praat/> 2014年8月24日アクセス)

¹³ 「Video Technique」国際協力事業団（現「国際協力機構」）沖縄国際センター視聴覚技術研修コース 1990年研修作品などを参考とした。

(11) 「mic-J corpus 日本人へのインタビュー」 (2009年12月公開)

外国人学生へのインタビュー・日本人学生へのインタビューを、自然会話の研究素材及び日本語中上級学習者向けの教育素材として収録し公開した。(10)については2007年6月、(11)については2008年6月に収録が行われた。両者とも、動画、BTSJ¹⁴によるデータが備わっており、公開されたデータの詳細については西郡・崔・磯野(2009)を参照されたい。

このコーパスデータは、研究素材として利用され、崔(2007)、(2008)；磯野(2010)、(2011)、(2013)などの成果をあげている。

(12) 『夢を紡ぐ町東京 2』 (2009年9月公開)

下記(15)の続編として中級者向けに開発されたものであり、新しい日本文化論紹介の要素が含まれている。具体的には、ロボット開発を行う若い技術者と、アミューズメント・パークのダンサー方へのインタビュー、さらに彼らの活動の場所である大田区・多摩地域の紹介を通じて、日本語と日本事情が学べる内容となっている。動画とともに、スクリプト、タスクシートが付随している。この開発については清水ら(2007)にまとめられている。

(13) 『ハイパー敬語入門』 (2009年8月公開)

このサイトは日本語のさまざまな敬語表現についてマルチメディアを活用して学習できるサイトとなっている。主に、大学のキャンパスの中での敬語表現を題材にし、全部で11の会話場面で構成されている。日本語の敬語に関する基本的な理論と形式についての学習や、学習した内容を練習問題を通して確認する内容も含まれている。日本語・中国語・韓国語版がある。『敬語の指針』(文化庁、2007)を参照した内容となっている。

(14) 『一葉の写真から』

(2007年9月公開。随時更新。前身の「写真集」は2002年から公開されている)

写真による日本の社会や文化の紹介と、日本語上級者の読解練習のために制作されている。大学院生の個人プロジェクトとして、現在の日本を象徴

¹⁴ 「Basic Transcription System for Japanese (基本的な文字化の原則)」の略で、詳細は <http://www.tufts.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm> (2014年8月24日アクセス)。

的に表す写真を撮影し、その内容の紹介を上級学習者向けの日本語の読解資料として作成した。読解資料の作成については旧『日本語能力試験 出題基準<改訂版>』を参照し、固有名詞以外は旧1級の範囲内で文章を構成するよう指導している。

(15) 『夢を紡ぐ町東京』 (2004年3月公開)

上級者及び上級を越える学習者向けのコンテンツである。若い文化人へのインタビューと彼らが活動する東京の地域の紹介からなっている。

従来の日本語教育では、日本の文化・社会等を「日本事情」として扱い、百科全書的な紹介が主流を占めていたが、上級学習者の国内外での急増や、彼等や日本人自身からの「現代において日本的とはどういうことか」という問いへの対応として、グローバルかつ今日的視点からの新しい日本文化論と日本語教育の内容が求められていると思われる。

このコンテンツでは、東京で新しい文化的価値を創造する若手文化人の紹介を通し、こうした課題に対応しようとするものであり、同時にインターネットとマルチメディアの利用により本学及び国内外の学習者への日本文化と日本語の学習支援を行う内容である。また、日本人学生に対する教育への援用も可能であるものを目指し、留学生と日本人学生が相互に学び合えるものを目指した。詳細については、西郡(2006)を参照されたい。

(16) 『VoAsp-China』 (2004年3月公開)

中国語(北京語)を母語とする学習者対象の日本語の清音・濁音の聞き取り練習で、この教材の効果測定と種々の調査をもとに(5)のVoAsp改訂中国語版が作成された。

(17) 『VoAsp-Korea』 (2004年3月公開)

韓国語(北京語)を母語とする学習者対象の日本語の清音・濁音の聞き取り練習で、VOTに加え、韓国語の「平音」「濃音」「激音」と日本語無声・有声子音との対照をもとに、2言語間の破裂音の異同について学習することができる。詳細については、西郡・朴ら(2004)を参照されたい。

(18) 『VoAsp-TradChina』 (2004年3月公開)

上記(16)VoAsp-Chinaの繁体字版で、内容は同じとなっている。

(19)『聴解レベル3』(2002年3月。2006年6月再整備)

(20)『聴解レベル2』(2001年7月公開。同11月問題追加)

(21)『聴解レベル1』(2001年3月公開。2008年9月まで問題追加)

(19)(20)(21)はそれぞれ、旧日本語能力試験3級・2級・1級レベルに対応した聴解クイズで、旧『日本語能力試験 出題基準<改訂版>』や、『日本語能力試験分析評価に関する報告書』(国際交流基金, 1995)などを参考にして制作された。大学院等のプロジェクトワークとして各問題のシナリオを作成し、プロジェクトメンバーでの相互評価を行ってシナリオを完成させた。さらに、録音上の技術的な研修を行ってから、母語話者による録音を行い音声教材とした。その上で実際に学習者に実施して問題の信頼性や妥当性に関する検討を行い、問題の少ないものを公開している。実例として、レベル1の上記過程の詳細は、西郡・宮田(2003)に示されている。

(22)『敬語』(2004年8月公開。2007年までファイル追加)

依頼を表現意図とした敬語使用場面を動画とスクリプトで示している。相手・場面・話題の人物による変化に焦点を当てた内容であり、敬語使用の分類方法は、『敬語表現』(蒲谷・川口・坂本, 1998)に準拠している。

各スキットの作成の原案から撮影・編集まで、大学院や学部での授業のプロジェクトワークとして取り組んできたもので、日本人学生の母語話者としての今日的感覚と規範的な敬語使用との異同や、留学生(日本語教育学院生)の感じる疑問などの議論をもとに制作されてきた。

(23)『擬態語』(2001年3月公開。2012年まで数度更新)

日本語に数多くある擬態語が直感的に理解できるように制作された。動画と、日本語・英語・中国語・韓国語による説明からなっている。

擬態語の選択や映像化の原案から撮影・編集まで、大学院や学部での授業のプロジェクトワークとして行ってきた。留学生(日本語教育学院生)にとって感覚的な理解が難しい擬態語を、日本人学生と留学生との意味論的な分析や議論によって進めてきた。

この教材の実際の使用場面への発展形として(2)の『きらきらオノマトペ』が制作された。

The screenshot shows a Moodle course interface for '中級日本語 (Intermediate Japanese Course)'. The breadcrumb trail is 'Home > コース > BLENDED LEARNING > 「新しいアジアとの交流事業」 > JPN-IMed'. On the left, a 'ナビゲーション' (Navigation) menu lists 'Home', 'マイホーム', 'サイトページ', 'マイプロフィール', '現在のコース', 'JPN-IMed' (with sub-items: '参加者', 'レポート', '一般', 'トピック 1' through '10', 'マイコース'), and 'マイコース'. Below the navigation are sections for '人' (People) with '参加者' and '設定' (Settings) with 'コース管理' and '編集モードの開始'. The main content area features a 'ニュースフォーラム' (News Forum) and two topic sections: 'トピック 1' (大田区ものづくり技術者へのインタビュー (1)) and 'トピック 2' (大田区ものづくり技術者へのインタビュー (2)). Each topic lists steps with document icons and checkboxes, such as '【ステップ1】 会話の映像を見ましょう'.

図-2 Moodle上のカスタマイズされたコース例

4. まとめ —ネット上の学習者の現在とこれからの傾向を考える—

前章までに取りあげてきた教育素材が現在mic-Jで公開されているものがあるが、もちろんこれだけを利用しているわけではない。著作権上あるいは教材としての完成度の上で問題があり公開はしていないものや、公開を終了したのも数多くあり、対面教育のみで使用され続けている教材もある。また、公開教材を有効に利用すべく、コミュニケーション活動のためにカスタマイズした素材も数多い。そして、もちろん外部サイトの情報を組み合わせて利用することも頻繁に行われている。

一つのコースとして、教師側（院生による教育実習や教育方法研究も含む）が本サイトの素材や他の教育情報をカスタマイズして利用する際には、学習者にmic-Jに直接アクセスさせるのではなく、学習管理システム（Learning Management System; LMS¹⁵）を通じて使用する方法をとることが多い。対面授業であろうと遠隔教育（テレビ会議システムやWEB会議システムによる）であろうと、LMS上でカスタマイズされたコースを設定した上で運営している。全体的な方法としては「ブレンディド・ラーニング」の一種と言えよう。図-2にカスタマイズされたコースの一例を示した。

LMSは教育のプラットフォーム、ポータルサイトとして非常に利便性が高く、出席・学習の進捗・動画や音声を含む教材ファイルの提示・課題の提示と提出・教師とのコミュニケーション・テスト・成績管理などが行える。若い学習者は子どもころからネットや電子機器に慣れ親しんでおり、短時間のリテラシーと自分で反復操作練習を行えば、すぐに容易に利用できるようになる。さらに、彼らにとって、Wiki, SNS, ソーシャルブックマーク (SBM), YouTube, ツイッター, LINE, スマートフォン・アプリケーションなど所謂 WEB2.0 ツールのなどの利用も日常的な技術革新の一つとして驚きなく受け入れられてきている。

LMSは学校教育などの現実の（リアルな）空間に変わるものとして発達してきた面があるが、このような学習者との接触や彼らの利用の実態を見ると、仮

¹⁵ Moodle(オープンソースのeラーニングプラットフォーム)を利用している。
<http://133.86.172.137/>

想的（バーチャル）な空間ならではというべき新たな学習形態が散見される。

例えば、『ハイパー敬語』の開発・利用の研究の際、韓国在住の学習者が、この教材をもとに学習グループを立ち上げ、日韓敬語の異同について議論を始めた。また、『一葉の写真』の中のいくつかの写真を遠隔教育のセミナーで紹介すると、SNSの中でどの写真に興味を持ったかの議論が、セミナーとは別に起こりランキング付けが始まった。さらに、ある対面授業の中で、LMSの管理下で学習することを説明し、教材の配布も学習者同士の議論も、必要なWEB2.0ツールもLMSを通じて利用することを促すと「LMS、うざい」という独り言が聞こえた。教育者側の思惑とは反対に仮想的（バーチャル）な空間ゆえに、学校教育の延長としてのLMSに管理されていることへの抵抗感を感じる者もいるようだ。もちろんLMSそのものの技術と内容も日進月歩であり、学習者の新たな興味を呼び起こすさまざまなツールも開発されている。上記の抵抗感はいくまで我々の使い方に関するものであろう。

総じて言うと、現在の学習者のうち、メディア利用に慣れた学習者の傾向として、学習しながらすぐに別のところへ移動し、さまざまなツールを利用したがる。また、必要だが短時間の閲覧・視聴ですむ情報だけに注目し、興味深いもの（単に面白いもの）があると、ネット上の知人の中で共有したがる。

もちろん、こうした特徴には負の面も多い。検索で発散的な思考は進められるが、収束させてまとめることがない。現実のコミュニケーションとは異なる感情的に見える言動、根拠のない言動のやりとりのために軋轢がうまれたりすることが、学術的にもジャーナリズムの上でも度々指摘されている。

しかし、学習過程において大きな可能性もあり、現在の学びと評価の形としてさまざまな展開も見られている。先述のe-Learning 2.0の論(Karrer, 2007)でも予見され、また、Griffin, P. et al (2012)でも、現状と近未来について分析がなされているが、ICTと利用しネットを介することで、学習者同士が幅広く出会うことができ、ボトムアップ、協働、学習者中心、ピア学習などを自発的自律的に始める傾向が育っている。学習というものが自分で知識や技能を得て、自分で構築して行くものだという自然な姿をICTが支援している面もある。

こうした側面の分析は、これからの実証的研究の課題とすることで、本稿を締めくくりたい。

< “mic-J” の制作に関する助成 >

以下の助成を受けていることを感謝とともに記す。

- ・ 平成 21 年度～平成 30 年度（予定）東京都アジア人材育成基金 首都大学東京 企画政策費「遠隔教育」代表者：西郡 仁朗
- ・ 平成 22-26 年度文部科学省科学研究費基盤研究(A)「自然会話リソースバンク構築による世界的教材共有ネットワーク実現のための総合的研究」（研究代表者：東京外国語大学・宇佐美まゆみ）
- ・ 平成 16-20 年 東京都知事本局 ANMC 21 新しいアジアとの交流事業 「遠隔教育プロジェクト」
- ・ 平成 15 年度 東京都立大学総長特別研究費「新しい日本学と日本語教育のための WEB コンテンツ開発」（研究代表者：西郡 仁朗）
- ・ 平成 14-15 年度 文部科学省科学研究費基盤研究(C)(2) 「日本語中上級学習用マルチメディア素材のデータベース化及び中国での利用展開」（研究代表者：西郡仁朗）
- ・ 平成 13-14 年度 文部科学省科学研究費基盤研究 B(1) 「外国語教育のための Web サーバー／モバイル技術を活用した 教育環境の基礎的研究」（研究代表者：大岩元）

参考文献

磯野英治（2010）「日本語母語話者のターン交替における語用論的特徴について—機能的分類による定量的分析と会話教育への示唆—」『日本学報』第 84 集、韓国日本学会、pp. 227-240

磯野英治（2011）「日本語の会話におけるあいづち・ディスコースマーカ―の語用論的特徴と会話教育への示唆」『중앙대학교 국제학술심포지엄 한·중·일 3 국의 이문화커뮤니케이션에 관한 보편성과 특수성 (Chung-Ang University International Symposium : The Universal and Distinctive Traits in Cross-Cultural Communicative Patterns of Three East Asian Countries; Korea, China and Japan)』、韓国 中央大

- 学校, pp. 23-33
- 磯野英治 (2013) 「日本語会話における表現形式と機能の多様性について—ターン交替時の発話に着目した定量的分析—」『日本学報』第 94 集、韓国日本学会、pp. 67-78
- 王威・王瑩・王艶・今村圭介・梅村弥生・神谷英里・王怡韓・徐蝶菲・西郡 仁朗 (2010) 「日本語授受表現学習の WEB 教材の開発 —カメラアングルに「視点」の概念を取り入れたビデオを中心に—」2010 ICJLE 世界日語教育大会, ポスター発表
- 王瑩, 西郡仁朗, Ahmad DAHIDI, Dedi SUTEDI (2010) 「日本語のオノマトペに対する感覚評価の対照研究—日本語母語話者, 中国北京語とインドネシア・スンダ方言を母語とする日本語学習者を中心に—」2010ICJLE 世界日語教育大会, 口頭発表
- 王瑩 (2011) 「日本語の擬音語・擬態語に対する感覚評価の対照研究—有声破裂音と無声破裂音との対立を中心に—」『第 13 回中国留日成果論文集』, pp. 9-16
- 神村初美・劉永亮・柳悦・彭韻・林香淑・神谷英里・陸黎莉・十市佐和子・西郡仁朗 (2010) 「TMU 聴解テストの開発について」, 『人文学報』, 首都大学東京都市教養学部人文社会系, pp. 40-53
- Karrer, T. (2007) “eLearning 2.0”, ISPI Los Angeles; Free OnLine Conference
<http://elearningtech.blogspot.jp/2007/11/elearning-20-presentation-ispil-los.html> (2014 年 8 月 21 日アクセス)
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店
- Griffin, P., Barry McGaw, B., and Care, E. (edit) (2012) “Assessment and Teaching of 21st Century Skills (Educational Assessment in an Information Age)”, Springer, Netherland (三宅なほみ監訳, 益川弘如・望月俊男編訳, 2014, 『21世紀型スキル 学びと評価の新たなかたち』 北大路書房)
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2002) 『日本語能力試験 出題基準<改訂版>』
- 清水政明・小松恭子・藤本かおる・馮秋玉・宮田剛章・西郡仁朗 (2006) 「「アジア遠隔教育プロジェクト」日本語マルチメディア教材の開発について」, 『日本語研究』26 号, 首都大学東京/東京都立大学国語学研究室, pp. 85-98
- 宋明淑・柳悦・西郡仁朗 (2005) 「マルチメディア教材による日本語の有声子音・無声子音の知覚の学習～中国母語方言別横断調査 2 中国青島の学習者を中心に～」, 『日本

- 語研究』25号, 東京都立大学国語学研究室, pp. 113-122
- 辛穎(2014)「中国北方方言話者における促音知覚について—後続子音の帯気性を中心に—」
『日本語研究』34, pp. 15-28, 首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会
- 崔文姫(2007)「日本語学習者の発話に対する日本人の評価—韓国人の日本語学習者に対する印象とその印象に影響を及ぼす要因—」『計量国語学』26(2): pp. 47-63.
- 崔文姫(2008)「韓国人日本語学習者の言語・非言語行動に対する日本語母語話者の印象形成—異なる属性を持つ母語話者の評価の相違—」『日本語研究』28: pp. 1-15. 首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会
- 西郡仁朗・河合雅仁・岩田之男・鮎澤孝子(1999)「アクセント聞き取り自学自習システム—マルチメディア10ヶ国語版 Win+Mac 対応—」『新プロ「日本語」ESOP チーム平成10年度研究成果報告書』, 国立国語研究所, pp. 27-44
- 西郡仁朗(1999)「マルチメディアによる留学生の日本語学習支援」『人文学報』301号, 東京18都立大学人文学部, pp. 1-20
- 西郡仁朗(2001)「The Evolution of a Certain Set of Teaching Materials from Paper Prints to Customizable Digital Data」『日本語研究』20号, 東京都立大学国語学研究室, pp. 51-68
- 西郡仁朗(2002)「日本語教育用 AV リソース公開サイト「mic-J」について」『日本語研究』21号, 東京都立大学国18学研究室, pp. 117-134
- 西郡仁朗・宮田 剛章(2003)「上級レベル聴解素材のWEB公開と項目分析による素材の評価」『日本語研究』22号, 東京都立大学国語学研究室, pp. 155-171
- 西郡仁朗(2004)「日本語教育用 AV リソース公開サイト「mic-J」: 2004年の状況」文部科学省科学研究費報告書(基盤研究C(2))『日本語中上級マルチメディア素材のデータベース化及び中国での利用展開』(研究代表者: 西郡仁朗), pp. 5-10
- 西郡仁朗・小松恭子・尾崎和香子・馮秋玉(2004)「中国人初級日本語学習者の有声音・無声音の知覚について—マルチメディア教材の開発と学習効果—」, 『日本語研究』23号, 東京都立大学国語学研究室, pp. 31-45
- 西郡仁朗(2006)『新しい日本文化論と日本語教育のためのWEBコンテンツ開発』文部科学省科学研究費報告書(基盤研究C)(研究代表者: 西郡仁朗)

- 西郡仁朗, 崔文姫, 柳悦, ディアンニ・リスダ, 藤本かおる, 小松恭子, 十市佐和子, ゼイ艶, 彭韵 (2007) 「日本語促音の自学自習教材 “KITEKITTE” の開発- マルチメディア支援多言語対応 WBT 教材 -」, 『日本語研究』27号, 首都大学東京/東京都立大学国語学研究室, pp. 51-64
- NISHIGORI, Jiro (2008) Distance Learning Projects in ANMC 21. IADIS International Conference e-LEARNING 2008, vol. 2, pp. 157-161
- 西郡仁朗・藤本かおる・清水政明 (2009) 「アジアの都市とのブレンディッド・ラーニングによる遠隔日本語教育」, 日本 e-Learning 学会 秋季学術講演会 (口頭発表)
- 西郡仁朗・崔文姫・磯野英治 (2010) 「mic-J コーパスの公開について-- 「外国人へのインタビュー篇」 「日本人へのインタビュー篇」」 『人文学報』 (428), pp. 31-39, 首都大学東京都市教養学部人文・社会系
- 西郡仁朗・王瑩 (2015) 「マルチメディア教材『きらきらオノマトペ』の開発とWEB公開について」 首都大学東京・都市教養学部人文・社会系 『人文学報』 (印刷中)
- 文化庁 (2007) 『敬語の指針』
- 三上京子 (2007). 「日本語教材とオノマトペ」 『日本語学』 26 (7) : pp. 36-46.